
風船と時計と夜空

ヤマダゴロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風船と時計と夜空

【Nコード】

N4569A

【作者名】

ヤマダゴロウ

【あらすじ】

男の昔話三文題（だっけ？）のお題にて。

掴まる物がなかったから、ただ必死ですがりついていた。
蛍光灯のコードのような、そんな細い糸でよかったのだ。
それさえあれば、こんなにも必死にすがりつく事なかったのに。

空を仰ぐと星が見えた。ちかちかと輝くソレは、手を伸ばせば掴める…。

ワケねえ。

「歳は取りたくねえなあ…。」

俺は溜め息をついて、また空を見上げた。

月が追い掛けてくると怖がったのは、何歳までだったか。

この世の全てが未知なもので満ちていた。

自分で自分の事が分からずに、怖がっていたものだ。

「自分が宇宙人じゃないかと疑ってたなあ。」

自然に口元に笑みが溢れた。

そんな事あるわけないのに。

「何でそんな事考えたのかなあ…。」

子供の考えは理解出来ない。

昔を思い出しながら、一人にやにやと道を歩く。そんな俺の姿は
えらく不気味だろう。

だが、子供の頃を考えてみたら、不思議と色んな事を思い出して
来た。

始めて一人で寝た夜。

友達との語らい。

ザリガニを取りに近所の川まで遊びに行っただし、そこら辺を走り

回った。

鬼ごっこにけんけんぱ。

新聞紙を丸めてちゃんばらごっこなんていうのも流行ったなあ。

思い出せば、かなり時が流れたように感じるし、僅か二・三年前の事のようにも感じられる。

俺は生まれた時から、多分ずっとこの町で過ごしている。

変わらない町並み。見慣れた風景。

だが確実に町は変わって、人も変わった。

緩やかに訪れる変化は、俺達にそうと気付かせない。

それがなんだか寂しくもあり、愛しくもあった。

少なくとも今は、その変化の過程は昔を振り替えれば思い出せるのだ。

なら別にいいじゃないか。何を不安がる？

俺は何を忘れた気になっているのだろうか？

気が付いたら、家の前を通り過ぎていた。

思い出に浸りすぎたのか。考えすぎだ。ぼんやりしている。しつかりしなくては…。

すぐに踵を返して、歩きだした。

「あんたって、肝心な所でいつもそう」

「え…？」

どこかから少女の声が聞こえた。俺は慌てて振り返ったが、誰もいない…。

気のせいだろうか…？

「でも、私はあんたの事。あんたのそういう所。かなり好きよ？」
気のせいでもいい。

夢でもいい。

それでも、なんでもいい。

この声は…。

「だから、忘れないで。約束だよ。」
忘れていた。

あんなに一緒に居たのに。絶対に忘れないと誓ったのに。
指先に、ふわりと暖かいものが触れる。俺は知らずにそれを握りしめた。

頬に冷たい物が流れる。

風の冷たさと重なり、その一筋を痛く感じた。

彼女の名前を覚えているかい？

焼けた肌に、黒く艶々とした美しい髪。

しかし、生まれもつてのくせつ毛で、それが嫌だと。何度も口にしていたのを覚えている。

だが俺は、その髪が好きだった。

からかうようにその髪を触ると、ふくれたように彼女は頬を膨らませた。

そしてすぐに微笑むと、頬を赤くして殴りかかってきた。

「気にしてんだからやめてよっ！！」

殴られた頬が痛かったが、それでもやめたりはしなかった。

「どうして忘れてしまったかなあ？」

いつも一緒に居たね。

好きとか、愛してるとか、そういう気持ちはよく分からなかったけれど。あの時君に感じたこの気持ちはそれに近かったんだと思う。

「大きくなっても一緒にいようね」

なんの保証もなかったけれど、子供心にそう約束した言葉に嘘や

偽りはなかった。あたりまえみたいに毎日一緒にいたものだから、大きくなってもずっと一緒にいると思っていた。

自然と二人でいつも遊んでいた公園に、辿りついた。時計を眺めたら21時をまわっていた。

いつまでも一緒に居たかったなあ。

いつかの4月。桜満開の公園で、泣きながら君から別れを告げられた。

大丈夫だよ、泣かないで。絶対また会えるから。

それは叶えられてはいないけど。

「こんな所でなあにしてんのさ？」

一人感傷に浸っていた俺に、恋人が声をかけてきた。

「べつつに」

俺は笑って彼女を見つめた。

「なんだよ、それ。」

あの時君は、俺が一人になると言って泣いていたね。
大丈夫だよ。

今はもう大丈夫になったから。一人じゃないから。君が居なくて寂しいけど、でも一人じゃないから。

「つつかお前こそ何してんだよ。」

「それがねえ、不思議なのよ。」

彼女はいささか眉尻を下げて頭を掻いた。

「私にもよく分からないんだけど……。」

「え？」

彼女は俺の正面に来て、にんまりと笑いながら俺を見上げた。

「急に会いたくなっちゃったっ…じゃあダメ？」

「…まったく。」

恥ずかしい事を。

それでもそう言ってくれた事が嬉しくて、彼女の手を取る。

「帰ろっか。」

「そうね。」

あの子は元気だろうか？

おそらく俺の初恋で、ずっと一緒にいられると思ってた。ずっと一緒にいると思ってた。

君に会いたいんだ。

その時君が一人じゃないといい。

想い出話を沢山しよう。

聞い欲しい話が沢山あるんだ。聞きたい話が山程あるんだ。沢山話をしよう。

会えたなら。

風が吹いて、桜の花びらが空に舞った。

完

（後書き）

去年の暮れに提案された三つのお題にて。遅くなりましたが…（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4569a/>

風船と時計と夜空

2010年11月19日08時54分発行